

# KTK ひゅうまん 京都

No. 554 2023年1月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内  
編集発行責任者／池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P1 左大文字 あそび
- P2 常任委員会から 池添 素
- P3 一人暮らし始めます! 沖田 友子
- P4 血の染みついたバトン 中村 暁
- P5 電動車いす「まんまる号」ドライバー日記 山本耕平
- P6 ジョニーの炸裂日記 ライスチョウジョナ
- P7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P8 2+2=詩 富士一文
- P9 障害のある人の権利を守る北障連から 山添 博史
- P10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P11 知っ得情報 松本 美津男
- P12 「SOSキャッチする」シンポが報道されました

「つどめ」さんからバトンを受け、今号から本欄を担当する「あそぶ」です。2年前まで左大文字の麓にある大学に勤めていました。退職後はかつて2年間住んでいた広島に戻り、宮島の対岸にある家から厳島神社の大鳥居を眺め暮らしています▲専攻は福祉政策論。主に障害のある人の労働・生活問題を対象に、ニーズに即応する福祉政策のあり方と福祉理念について、平等回復を目指す諸運動に関わって研究しています▲学生時代から大学院修了後も取り組んだのは堀木訴訟です。訴訟のきっかけは「全盲のため障害福祉年金を受給している自分に限って、なぜ離別母子家庭の子どもを対象とする児童扶養手当が支給されないのか」という堀木フミ子さんの疑問に始まっています。訴訟は最高裁で敗訴になりましたが、一審勝訴判決を受けた法改正により、障害・離別母子世帯に手当が支給されることになりました▲鹿児島の離島に生まれ、幼児期に失明、学校教育を受けられず、神戸で鍼灸師の徒弟として働き、独立後は結婚と出産、離婚による暮らしの厳しさなど、堀木さんの生活史を伺いました▲声高に権利主張をする人ではありませんでしたが、「提訴したのは後に続く若い人の苦勞を思ったからです」と言われたことを覚えています。貧しさを生む理不尽な欠陥制度に闘いを挑み、法改正を実現した人物として記憶されるべきだと思います。

(あそぶ)



「卯」  
渡辺あふる

# 常任委員会から

〈切実な声があふれる〉

12月25日、クリスマスにもかわらぬ現実。100名を超える人たちが久しぶりに二条駅近くの佛大キヤンパスの教室に集まりました。

今回は「子どもと親のSOSをキ

ヤッチする仕組みを考える実行委員会」主催で取り組んだ4回目の企画。テーマは、「京都市に暮らす障害のある人・家族の生活実態調査」。

〈親も当事者〉

「子どもと親のSOSをキヤッチする仕組みを考える実行委員会」主催で取り組んだ4回目の企画。テーマは、「京都市に暮らす障害のある人・家族の生活実態調査」。

「安心して暮らせる地域を目指す」が目的です。最初は調査報告で田中智子（佛教大学）さんから。500人の保護者の切実な声を数字で表現。アンケートに答えてくれた障害児を育てている保護者のほぼ全員が、子どもや家族の障害について不安を感じていることが明らかになりました。生まれてからずっと、親は子どもを育てることに不安を感じているという子どもはほとんどは楽しいはずの子

の心配が大きくなります。グループホームを利用していても、実際は365日ではなく、しょ

は、障害児を育てることを労働組合での理解を得てきた取り組みを。大阪からは「暮らしを考える会」の播本さん、京都の人は上品

つも家族があてにされている現実。安心して利用できるグループホームがなく、仕方なく一人暮らしを選択したが、部屋探しのため不動産まわりをしても、知的障害者の理解は低く、ヘルパーが入るというだけで重度だ

だ。もっと派手にとエールを。広島の児玉さんからは、発信することが大切と、うれしいエール。立命館大学の斎藤さんからは、ケアラー支援条例の話。4人とも

と暮らしてしまふことに驚いた。社会の理解の低さに直面した。一人暮らしが始まったが親の出番も多く、常勤で働いて

送ってくれたことはこれからの運動の財産になりました。1月11日に私たちが出した要望書に対しての京都市からの回答を聞きに行きました。7人の行政マンに同じ数の親や関係者、回答

は全く納得できないものでしたが、その気持ちの少しは伝えることができました。詳細は次号で。一歩でした。

〈心強いエール！〉

東京からオンラインでエールを伝えてくれた、マスコミで働く障害児を育てる工藤さんから

池添素（京障連事務局長）

# 一人暮らし始めます！

沖田 友子（京障連代表委員）

〈課題だらけのグループホーム〉

先天的疾患で肢体障害、知的障害のあるもうすぐ40歳になる息子の暮らしについてです。息子は現在車椅子利用で、言葉はありません。

じお弁当屋さんのお弁当と決まりかけ、どんどん安心できる暮らしは遠のいていく、いつまでたっても心が痛むことばかりと感じていました。

グループホームに入居して約7年になりますが、この2年ほどで3名の方が施設入所されました。週末は自宅に帰ることとなつている家族介護を前提にしているホームの暮らしで、家族が亡くなられ、介護できなくなつたという理由からです。

夜間眠れず、早くにおきてリビングで過ごす人もいます。国が考えているように、夜間、世話人一人で対応することは難しいです。支援がたくさん必要な人が利用するグループホームは現在の報酬単価では運営できず、施設独自に職員の持ち出し人件費が必要になつているのが現状だと思われれます。

人件費を抑えるため、宿泊できる日数は1年ほど前、さらに1日減つて月曜から木曜までとなりました。夕食も職員手作りになりました。昼も夜も同

家族に基礎疾患があつても、仕

事をしていても、「できません、ホームでなんとか見てください」ということはできません。昨年は4回も自宅待機になることがあり、たいへん疲弊した年であり、今後の暮らしについて考える時間をたくさん持てた年でもありました。

かかるということでした。長い間お世話になつている居宅介護事業所がそのまま支援を継続できると言つてくださったことが大きく背中を押してくれました。本人との信頼関係も深く、家族には見せない姿を見せることができ、これから先、いろいろなことが起きるかもしれませんが、一緒に考えてもらえる心強い存在として、そばにいてもらえるということが、これらの人生を考える出発点となりました。

マンションの改装を行い、ヘルパーさんのお力を借りながら一人暮らしをすることができないだろうかと物件探しをしていました。そのようなタイミングで、福祉施設の中にバリアフリー賃貸物件を作っているのですが、どうですかというお話をいただきました。物件探しのたいへんさは身に染みていましたので、すぐにバリアフリーということ

で、前回きに考えました。一番の心配は今までと住む行政区が変わるので、支援してくださる事業所との関係がそのまま継続できるかどうかということと夜間泊まつてもらえる事業所が見つ



# 血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

## ㊤ 「事実は何の中」

高齢・障害の施設入所者がコロナに感染し、生命の危機に瀕しても入院できず死に至る「留め置き」の解消を求め、

京都府当局や議会への要請を続けている。2022年12月

15日の議会で府知事は6月15日から11月末までの高齢者施設でのコロナ死者数を92人と答弁した。同期間の全

コロナ死者の21%にも及ぶ数字である。現在、コロナ患者の入院調整は府の設置する

「京都府入院医療コントロールセンター」が一元的に担っている。各病院の状況を把握

し、速やかに入院先を調整するだけなら優れた取組である。だが私たちの調査や事例

の把握を通じ、同センターが

入院の可否判断まで行っていないのではないかと疑問が浮上している。

もし臨床にある医師でなく行政が「入院不可」を判断しているとするれば、「入院できない」

のではなく「入院させない」のであり、その死には作為であれ

ないか。まして事例には「延命措置」希望の有無が入院可否判

断を左右していると思えるエピソードもある。府知事は「入

院すべき人は入院できている」との答弁を繰り返しているが、

では92人の方は「入院すべきでなかった人たち」なのか。「入

院すべき」の真に意味するところは何か。未だ事実は闇の中

類」へ引き下げる検討に着手している。このままうやむやにしてはならない。それは亡くなった人たちへの冒瀆である。

年末、ある留め置き事例に関

する「公文書公開請求」（内容は詳しく書けないが、コントロールセンターと消防隊員や保

健所とのやりとりの記録の公開）のため、府庁の「府民総合案内・相談センター」に赴いた。

はじめに法務を担当する職員さんが来てくれて、しばらく待っている、次にコントロール

センターの職員がやってきた。彼は走ってきたのだろう、ハア

ハア荒い息をしている。彼は私の請求の趣旨説明を最後まで

聞かずに遮り、「請求されても公開できない。そもそも受け取れない」という意味のことを言

い放った。キレイやすい私は「それはあなたが決めるのか」と問

れ受理はすべきであることを4ちゃんと言明してくれた。一方の彼は私に「事例の有無自体が個人情報」であること等を説明した。

この日は結局、考えるところがあつて請求の一旦中止を

判断した。それより私に強い印象を残したのはセンターのスタッフの表情や態度である。彼は終始、苛立っている

ように見えた。こんなことに時間を取られたくない、というところか。もちろん彼が公務労働者として必死で働いて

いることはよく伝わってきた。だが彼は「公開請求」が

自らの仕事に問いかけていることの意味を少しでも考えようとしただろうか。それを考

える余裕もない労働環境でセンターの入院調整が行われているのだとすれば、それは公務労働者の悲劇であり、府民

の悲劇である。

# 電動車いす「まんまる号」 ドライバー日記 ⑨

山本耕平

ずいぶん前ですが、韓国で交通権を主張し国と闘った障害のある仲間と出会い、お話しをつかかったことがあります。彼らは、2001年に起きた悲しい事故について語っていました。

それは、韓国のソウル地下鉄5号線のオイド駅で起きた障害者の死亡事故です。階段昇降機から電動三輪スクータードライバーの仲間が転落死したのです。故障や事故がたびたび起こっていたリフトと呼ばれている階段昇降機は、囲い棒状のもので四方を囲んでいるのみのものでした。この事故の後、2004年に、障害者団体の運動もあり、「交通弱者移動便宜増進法」ができ、エレベーターも設置されてきたようです。この法律でい

の実習を行なっている精神科病院を訪れた時のことです。精神科病院がある駅に到着する時間は、先に調べ、JRの指示通り、前日に連絡することができました。しかし、帰りは指導が長くなるか短くなるか分からない為に、事前の時間調整はできなかったのです。学生指導が終わり、その駅に戻った時に、心配したように、駅員が、昼間の駅員不在を知らせる紙を窓口に貼ろうとしているところ

私の仕事のなかに、実習中の学生の巡回指導を行なう大切な仕事があります。この巡回指導は、平生の生活の場とは異なるなれないところへの訪問であり、移動の制限（複視と視野狭窄）が著しい私は、すべての巡回指導に妻の同伴が必要となります。



でした。遠くから、「すみません、介助お願いします」と、なんとか乗車時の介助を依頼することができました。昼間、駅員が不在になるのは、JRが民営化された1987年以降、起こっていることです。経営のスリム化の為に、職員の大量解雇や、業務委託や簡易委託を進めるなかで生じてきました。2019年の調査では、無人駅率が、JRグループが54.3%、大手民間鉄道が7.6%、民間鉄道が38.1%となっています（国土交通省、現在の無人駅を巡る環境について）。ここにも、JR民営化の大きな課題をみることが出来ます。国土交通省は、今年（2022年）7月に、多くの障害者団体と交渉し、「駅の無人化に伴う安全・円滑な駅利用に関するガイドライン」を出しました。ただ、それは、十分なものではありません。しかも、地方では、バリアフリーが進んでいない駅が多いのでは？

# ジヨニーの炸裂日記13

ライスチヨウジヨナ（イラストレーター）

最後に年賀状を出したのが2010年の正月なので、もう13年も年賀状を出していないことになる。2010年が寅年だったのでイカつい虎の写真にでっかい文字で「賀正」とだけ書いたデザイン。とにかくクールなデザインで決めたかったのだが、今考えると明らかに言葉数が少なすぎた。とくに何か心境の変化があったわけではないが、13年経った今回は久しぶりに年賀状を書いてみるのもいいのではないかと思いついた。「どうだ俺が描いたこの素晴らしい絵は。こんな年賀状見たことないだろう」とアピールしてみるのも悪くない（よこしまな動機）。しかし問題発生。行動に移すのが遅すぎた。年末ギリギリまで絵の仕事が立て込んでいたため

最後に年賀状作りは年明けに持ち越し。その上、一旦忙しさから解放されると糸がぷつんと切れてしまい、元旦は何もやる気が起きず、年賀状を作り始めたのは1月3日。さらに、年賀状は松の内の1月7日までに届くようにしないといけないという新事実が発覚。1月7日まで：？

13年目の年賀状、ならず。14年目に再挑戦です。しかしせっかく描いたのだから、寒中見舞いとして出すことにしましょう。

戦（



とも知らないと何事か。若さゆえの過ちである。しかしまあ3日もあれば絵も描けるし、完成したらすぐ印刷してすぐ出せば間に合うだろうと悠長なことを考えていたら案の定間に合うことはなかった。描いていた絵をあれもこれもとこだわって描いているうちにどんだん時間が過ぎていき、結果的に完成に7日間もかかってしまったのであ

# つれづれあらぐさ

あらぐさ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

## 場面⑦ 府道沿いの花壇に、

### パンジーやビオラを植える

あらぐさは、12年前から京都府（土木事務所）の「さわやかボランティア・ロード事業」に携わっています。これは、府が管理する道路の一定区間で清掃や除草・植栽管理等のボランティアを行う仕組みです。当時のメンバーさん達と「あらぐさ☆はなさか隊」と名付けて、活動を続けてきました。

花壇いっぱいにはあらぐさで育てたビオラが咲き誇っていた時期もあったのですが、最近では全部で4つある花壇の手入れが十分に行き届いていませんでした。近所の方から「草が伸びてるなあ」と声をかけられることもあり、一念発起。地域の人や利用者さん達が通る道沿いの花壇をきれいにしようと、昼休みにやって来

るメンバーと一緒に活動することにしました。

まずは雑草を抜くことから始めたのですが、かなりの量でした。猫の糞が見つかる、清掃用トンクを使って処分。タバコの吸い殻の他に、スナック菓子の袋やおにぎりのビニール等も捨てられていました。近所の方の「きれいにしておくと、ゴミも捨てにくいんやろけど」の言葉に、考えさせられました。

花苗はあらぐさで種から育てたビオラだけでは足りなかつたので、ホームセンターにも買いに行きました。お気に入りの色を選んで、「ハートにする」とメンバー。どうやってハートの形に植えるのか、インターネットで画像を見ながら相談しました。

大きめの花壇に植える時は2人だけでなく助っ人を呼ぶと、他のメンバーをスカウトしました。あらぐさから少し離れた場所にある花壇まで、約80ポットの花苗を台車で運んで作業開始。一人が花苗を選んで渡

す係、もう一人が土を整える係でした。

戦隊ものが好きな彼は、「ブラック〜」「レッド〜」とヒーローの色と重ねながら、花の色を言って苗を手渡していました。「（考えて）頭使ってる」と言う彼女は、固い土をスコップで掘り返してから苗を並べていました。「自分で出来るし」と、植えるのもやってみようと思いついたようです。

植え終わった後の空きスペースには、再びハートを作ることにしました。「ハート、ハート」「石集めよ〜」と、花壇のあちこちから石を集めて3人でせっせと並べました。「ハート」と「石ハート」はあらぐさのインスタグラムに載せていますので、ぜひご覧ください。



ARAGUSAHUKUSIKAI

中山 恵美子（あらぐさ福祉会）

## 2+2=詩

「たくさんの僕」

電灯の下で本を読んでいるとき、ふと思った  
昔からこうして本を読んできて

今もこうして本を読んでいる  
今、僕は生きている

でもあの頃の僕はもういない

ホラー映画が見れなくて、トマトを食べられなくて、

運動神経は悪いけど子供らしく跳ね回るのが嫌いでなかった  
僕はもういない

今の僕はある頃の僕ではない

ホラー映画見ることができて、トマトはむしろ好きなほうで、  
子供らしく跳ね回るなんて思いもよらない僕は、  
もう別の人間のようにだ

あの頃の僕は死んだのだろうか

それとも今の僕の中に生きているのだろうか

僕の道のりの中に、あるいは僕の内側に

はたしてどれだけのあの頃の僕がいるのだろうか



「空が高い日」

風の簾がびゅうびゅうと空を掃いていく  
大きな埃のような雨雲も

糸くずのような綿雲も、

みんなみんな掻き出して掻き消して

塵一つなくなつた嘘みたいな青空の中、

おひさまが気持ちよさげに寝返りをうった

「春はどこまで」

北風。冷たい水。弱い日差し。

いろんな冬が、たくさんの冬が、

僕らの体に染みていく

葉の落ちた木々。積もつた雪。深い闇夜。

押し寄せる冬が、居座る冬が、

世界中を満たしている

けれどもそれも永遠ではなくて

春風。梅の香り。増える色彩。

やってくる春が、暖かい春が、

もうすぐそこまで駆けてきている

作・富士一文 挿絵・水口萌恵





## 障害のある人の 権利を守る 北障連から

〜いつの時代も地域とともに〜

京丹後市にどんな障害のある人も暮らすことができるグループホームをつくる会

事務局長 山添 博史

(あみの福祉会常務理事)

京丹後市にある社会福祉法人あみの福祉会が取り組んでいる「グループホームづくり」について、4回シリーズでお伝えさせていただき、京都北部で地域とともに育んできた障害者運動の今日的な到達や課題にも繋がればと考えます。

### 1. あみの共同作業所の立ち上げから障害者運動の視点で

社会福祉法人あみの福祉会(京丹後市網野町)は、今から22年前の2001年8月に社会福祉法人となりました。その前身

である「あみの共同作業所」は38年前の1985年、仲間2名と1名の職員によって「あみの共同作業所」が産声をあげました。このことが、この地域のこれからの障害者運動のセンター的役割を果たしていくこととなります。

わたしは、法人格をとる1年前の2000年4月に、15年間勤めた知的障害者入所更生施設(現在の入所施設)を辞めて、あみの共同作業所に入職しました。法人認可の仕事を中心に、地域に働きかける取り組みも進めました。

先代の前川嘉之所長も、長年勤めた農協や生協を辞めて、共同作業所に飛び込んだ方ですが、所長が取り組まれたことのひとつは、家族会を組織することでした。それまで、ほとんど機能していなかった家族会を「仲間や家族ががんばらな、何も進まん！」と事あるごとに家族会役員会を長時間にわたって開催してこられました。「前川所長になってから、

たくさん出てこんんで、かなんなあ」と言いながらも、家族も遅くなりました。そして、この時代は全国のどの共同作業所も取り組まれたことですが、バザーの開催や夏祭り、そしてきょうされん(旧・共同作業所全国連絡会)国会請願署名・募金の取り組みも行いました。

事あることに諸団体を巻き込みながら地域を回ります。職員は常に地域に出ていくことから、人や場所を覚えていくことになりました。それがいすれ大きな財産となっていくことを私も随分後になってから気づきました。また、あみの共同作業所の凄いところは、きょうされん旧・共作業所全国連絡会が全国でおこなっている国会請願署名・募金運動において、網野町内全戸を回って署名や募金を訴えていることです。それは今日でも息づいています。

地域に足を運んで仲間が自分の思いを語り、職員が請願項目を伝

えます。募金についても仲間が強く訴えてくれます。職員はお金のことはなかなか言い出せませんが、仲間はさすがです。

実はこれが、とても大切なことなんです。地域に仲間が見えてくるし、仲間・職員も地域が見えてきます。私は他の町からあみの共同作業所に通っていましたが、最初に驚いたのは、仲間のみなさんを地域のあちこちで見かけることでした。自分の町は大きな入所施設があり、町で障害のある人を見かけることはほとんどありませんでした。

「生まれ育った地域であたりまえに暮らし続けたい」という仲間の長年の願いは、地域の理解とともにグループホームをはじめ、様々な事業を生み出していくこととなります。(次号は「行政や関係団体の中で果たしてきた役割」)

# 365歩のマーチ



## 34 箸が転んでも怒るお年頃

「言いつつ言いつつ」「言いつつ言いつつ」

になってきたゆいち君。「ゆいち

くん、はみがきしよー」「よしはん

を食べてはばいして誘う」「寝

るって言いつつからいー」「と怒らわね

ます。そこからばいしてロククで

遊び…」「テントつうらだいたい」と

今はまっているテントつうら(タ

ンスや押し入れにシートを挟ん

でテントのようになっています。これも

「ちっちゃいテントいやー」「天井

部分が開いている」「こっから雨

入るー」「注文の多いゆいちくん

です。がはじまらます。22時が

近づいてくるとおひなびながに眠た

なっていて、おひなびながに眠た

らうしてはじまらます。寝てしまっ

ては歯磨きができません。母が歯磨

きに誘うと、「ママが寝かせてく

れない」と八つ当たりというかな

んというか…。

朝は朝で、

父「起きるよ」

父「ママがいろいろ」

父「やあー」

テレビをつけていると…

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

父「もう行くよ」

※

職場の同僚から、スパイダーマ

ンの服をいただきました。頭まで

すっぽりかぶり、顔の前でチャッ

クを閉めて被り物になる服です。

ある日、「おみやげもらったよ」と

服を持って帰り見せた途端に目が

キーン！母に見つからないよ

うに別室で着替えて、「こらー

ー！」と部屋を飛び出て母親を驚

かせていました。その後もスパイ

ダーマンになりきって父を倒した

り、ほくほく顔のゆいちくんとし

た。

次の日…。ピンポン。いつも

のクリーニング屋のおじちゃん

が、洗濯物を取りにやってきました

た。来客が来ると真っ先にお出迎

えをしたゆいちくん。そこで父

が(結果的に)余計な一言「スパ

イダーマンで行ったらっ。」一瞬、

間のあつた後、「スパイダーマンで

行くー！」とやる気満々のゆいち

くん。そこに母の一言「今洗って

るよ。」いやー、いやー」と

大怒りのゆいちくん。玄関に向か

う扉を閉めて母を玄関に向かわ

せないようにします。なんとか

辿り着いた母はクリーニング屋

のおじちゃんの対応をします

が、ゆいちくんは怒り狂ってい

ます。おじちゃんは「どうした

の?」「またスパイダーマン見え

てね」と優しく対応してくれ、

クリーニングに出す服をゆい

くんがお手伝いでおじちゃんに

渡すことで納得していました。

ただただイヤイヤ言っているだ

けではなく、かっこいいとろ

をおじちゃんに見てほしかった

のですね。

3歳6か月、自分の事情がし

っかりとしてきました。箸を転

がしているのは大人、何をす

にしてもちゃんと相談しなくて

はいけません。

安藤 史郎(あかひつむら)の園

# 知っ得情報

## 飲み込みにくい人への料理提供店

代表委員 松本 美津男

京都の3店の内容を簡単に紹介します。※原則として事前予約が必要。

### かさい食堂

歯茎で潰せる硬さ程度に調理。巻き寿司、かつ丼、うなぎ丼を提供。

汁物等トロミが必要な場合は、客自身で付ける。必要に応じミキサー食も。

住所 京丹後市峰山町杉谷899 電話0772・62・0276

### みんなのカフェぐりぐり

ほぼ丸飲みできる硬さのカツカレー、もち好きの人に風味を含めて楽しんでもらえるゼリーのような食感の「もちゼリー」を提供。

嚥下障害があってもなくても同じ食事を一緒に楽しめるカフェを目指している。デリソフターやとろみ粉も準備。

住所 宇治市五ヶ庄寺界道25-1 電話0774・31・3492

### 京料理せんしろう

京料理をベースに、きざみ食、ペースト食、酵素食を提供。

事前に状況を相談してもらいその人にあつた食事の提供を目指す。

住所 京都市右京区西院安塚町23 電話 075・322・1913



## あなたもぜひ 仲間に

サロン・サークル・地域活動展開中  
生活支援スタッフ(資格不要)募集中  
介護職員(資格要)募集中  
ひとりぼっちの高齢者をなくそう  
元気な高齢者はもっと元気に  
「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に  
京都市北区紫野東野町1-5  
電話075-432-3636

命の平等をかけた、  
無差別平等の医療と  
福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: [info@kyoto-min-iren.org](mailto:info@kyoto-min-iren.org)

ありがとうございます

会費 川手秀己 (敬称略 2023.1.10)

1992年6月5日第3種郵便認可(毎月1回25日発行)  
2022年1月25日発行 KTK通巻5331号

〒602 8144

京都市上京区丸太町通黒門東入藁屋町536-1  
発行所 京都障害者団体定期刊行物協会  
発行人 高谷修(購読料は会費を含む)

元待賢小学校1階 京都難病連内

# 障害者の家族 悩み切実

## 中京で「SOSキャッチする」シンポ

### 進路や住まいの問題語る

障害者とその家族の問題を考える「子どもと親のSOSをキャッチする仕事」を考えるシンポジウムが京都市中京区の佛教大二条キャンパスで開催された。障害者の親が、子どもの進路や住まいの問題、自身の老後の不安などについて語り、支援の充実を訴えた。

障害者の親らでつくる実行委員会(北区)の主席、高谷修は、2019年にうつ病の母親が17歳の知的障害の長男を左京区の自宅で殺害した事件を機に発足した。4回目となる今回のシンポでは、障害者をケアする家族のライズ・ア・デイなどの悩みをテーマとした。母子を京都市立総合支援学校に通わせる母親は、母子の間に設けられた行政に助けを求め、両親が健康だと確認サービスは限られると言われた経験を振り返った。「親が死なないか、働けてもらえないか、養育的な状況を前向きな支援を学齢期にも取り入れてほしい」(大野野子)

実行委員会メンバーの佛教大の田中智子教授(障害者福祉)は、障害者とその家族の生活実態に関するアンケート結果を報告。障害者を支える資源が不足していること、社会がケアの役割を担っていないこと、養育的な状況を前向きな支援を学齢期にも取り入れてほしい(大野野子)と訴えた。

「グーループホームで暮らし始めた息子がいる母親は、障害者の住まいの問題を語った。息子のグーループホームは経営が厳しいため週半ば程度は帰宅しているといい、「国の報酬単価では運営できず、修繕費が持ち出し」ている。親がなくなったら利用者は退所せざるを得ない」と語った。

子どもと親の仕事や第二子をおおらめなければならぬといった親自身の人生の悩みや、子の進路が決まりにくいことへの不安も打ち明けられた。

2023年1月8日(日) 京都新聞より転載